

## 晩年のヘルダーリン

オイゲン・ゴットロープ・ヴィンクラー著

松 川 弘\*・訳

(平成16年8月4日受理)

### Der späte Hölderlin

von

Eugen Gottlob Winkler

Aus dem Deutschen

von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Aug. 4, 2004)

ヘルダーリンのフランスからの帰還については、ほとんど知られていない。彼の晩年の40年間にわたる狂気は、その暗闇にごく僅かな事実の光しか差し込まない、彼の人生のこの時期に決定付けられたのである。ホルドーのドイツ人商人の家で、家庭教師兼牧師として、彼は4か月を過ごした。1802年5月10日に、彼はこの町を離れた。彼がなぜ、このように突然旅立ちを決意したのか、その理由は不明である。この頃の彼の書簡には、自足の言葉しか見られない。南国の夏の正午に、彼は、徒歩で故郷にさまよい帰っていった。帰還後にニュルティンゲンから書き送った手紙の中で、彼はパリ滞在について言及している。シュトラースブルクからリヨンへ、そこからオーベルニュを通過してフランス南西部に至る、ホルドー行きは往路とは違い、彼は、今度は北に、ポアトゥーやトゥーレーヌに向かったに違いない。彼は、フランスの革命軍がヴァンデーで反徒たちと交えた残酷な戦闘の跡に出くわした。父祖たちによって受け継がれ神によって保証された秩序、自分たちが昔から慣れ親しんでいる神聖な現実の秩序を、不遜な精神の暴力的な夢想、天国的でも現世的でもない、妄想の自由と極端な平等、下劣な博愛という三つの星から守るために、農民たちは、大鎌とからざおを手にして前進したのだった。ヘルダーリンは、「荒涼とした、もの淋しい土地」を見、その本質を根底から揺り動かされ、惑乱して、1802年の晩夏に、親戚の家にとどり着いたのである。

創造力の最後の飛躍が訪れた。『ライン』や『ゲルマニア』、『パトモス』といった詩が成立した。ヘルダーリンの

死後半世紀にもわたって、長詩句だけを詩人の作品としてきた批評家たちも、最近になってようやく、こうした自由律の詩を解釈可能と見なすようになった。とはいえ、『パトモス』がすでに、解釈しがたい多くの精神的な素材を含んでいる。この詩ではまだ、神話的な世界秩序の体系は、点々と、部分的にしか認められない。だが、新たな克服しがたい秩序の観念の基底が、そのあいだに口を開いている。ヘルダーリンの感性が切望したギリシアの神々の世界と悲劇を克服する救済的なキリスト教の世界のあいだの葛藤、古代の偶像神とプロテスタンティズムによる神の観念の非具象化の対立が、詩人の最後の讃歌の中で、疲弊した魂と脆くなった精神により、今一度止揚されようとしている。18世紀の敬虔主義によって育まれた合理主義的なチュービンゲン大学神学寮の学生だったヘルダーリンは、結局は、キリスト教の庇護から完全に抜け出すことはできなかった。(学校で学んだ合理主義は、精神的な気候の低圧部として、ビュルテンベルクの家でとりわけしっかりと形造られた敬虔主義的な時代精神は、高圧部として、ともにヘルダーリンのキリスト教信仰を規定している。) ヘルダーリンは、恐らく多くの人々の問題でもある個人の問題を、詩によって表現しているのだ。問題の内容は、時代的に説明可能であり、精神空間においてそれが占める特殊な位置の考察および評価は、その詩としての見かけとは無関係になされ得る。ここで個別に繰り返し試みられている古代とキリスト教の和解は、それがはらむ矛盾ともども、キリスト教思想そのものと同じくらい古い問題なのである。伝統

\* 広島工業大学工学部電気・デジタルシステム工学科

なしに受け継がれ再発見された古代と、知性と感情によって消し去られたキリスト教が、ヘルダーリンの中で、厳しく対峙している。その不和は、中世のスコラ哲学の同化のプロセスを経たカトリック思想がいまだかつて体験したことのないほどのものであった。スコラ哲学においては、両者の密接な結合が実現されていた。キリストは、口碑によるとマリアの息子と同じように神的な超自然により受胎されたヘラクレスの兄弟であり、現世の苦難や苦悩から人間を救済し、人間の原罪によって人間として死に、神人として神々の社会に受け入れられることになる。また、外見の類似にとらわれた解釈者は、ブドウ畑の創設者であるディオニュソスをキリストの先祖と見なしたりもした。

形象のもつ意味は、そのスケールや作用の範囲からすると一定していない。それは、狭められたり、広げられたり、用いられるたびに変動する。キリストは、ある時には、没落した神々の天空の相続者であり、光明なき時代に神聖の支配を守り、その支配のしるしは、象徴の比喩能力で保たれている。またある時には、この神の息子は、精神により現象を洞察し克服する偉大な成就者であり、神的な諸力の最終的な変成であって、ギリシア的な擬人化の多様な表現法の究極的な造形化となっている。しかし、ヘルダーリンの場合にも、キリストは、神的なもののあらわれであり、神そのものとはみなされていない。彼の素姓と復活がもつ超越性とその紛れもない受肉のあいだの見かけの矛盾に、キリスト教の教義は、人間の身に生じた偉大な奇跡と救済を認めているが、ヘルダーリンは、この矛盾を、神秘性の希薄な分かりやすい神話に止揚し、解釈している。把握しがたいものは確かに理性から身を引いているが、信仰の神秘性は、具象的な形象でかえってあらわにされるのである。

しかし、ヘルダーリンの場合、古代の神の観念のキリスト再臨論的な前衛がルター派のキリスト教徒の個人的な回心と重なり合うので、大きな総合はまだ生じていない。この観念の2つの領域は、互いにまったく距たっている。ここで生じているのは、建造者とそれを利用するすべての人々を此岸と彼岸の間に拘禁する橋にすぎない。この橋の上に立つ者は、現実の空間の外にすることになる。その橋のある場所は、押しつけられたごく狭い空間で、何を建てることもできない剥き出しの場所である。両岸からそこに近づく術はある。橋に出くわした異教徒は、信仰を、もちろん完全にはないが理解する。彼は、信仰の国のことだけを思い浮かべる。そして彼に相対するキリスト教徒は、古代を認めることはできるだろうが、そこに到達しそこに留まることは不可能なのだ。住民たちがよく身を委ねる思考が、影と個々の価値の交渉を可能にする。神は、そうした思考に悩まされながら、色とりどりの極めて厳密に吟味された橋を通過する。だが、彼はその上に留まることなく、

自分の本性を告知することもない。此岸と彼岸の諸価値が、取り引きされ交換される。そして、こうした橋の住民たちは誠実なので、彼らの指には何の利益も残らない。彼らは貧しく裸のまま、絶えず不確かなものにさらされ続ける。彼らが持つ橋は、賛美歌の栄えあるアーチでできている。その上で生活できる者がいるだろうか？ある者は自らの苦悩に堂々と耐える術を知っており、またある者は自らの苦悩について無知であり、盲目である。ヘルダーリンの名のもとにこの場所を後にする最初の人物は、ヘルダーリン自身であった。

独自の、きわめて重要な内容の大まかなスケッチと特有の語り口が姿をあらわすのは、かなり後のことである。26歳のヘルダーリンはまだ、総合的な夢想の生命のない真空の世界に囚われていた。ディオティーマが初めて彼をそこから救い出し、現実の前に立たせたのである。詩人はまだ生を知らない。根源的な個性を欠く彼は、まるで必要に迫られたかのように現象の類型論を受け容れる。ディオティーマ体験は、こうした詩人を焼き尽くし、残った灰から根源的な個性を生じさせたといえよう。だが、ヘルダーリンにとって、彼の運命はここから始まったのである。ディオティーマは、今までの詩人を相殺するのではなく、それを妥当な本質とすることで、彼の中に人間を創造したのだ。その観念論的な性向からすると、ヘルダーリンの文学的な自我は、この体験によって改造されたわけではない。無意識の潜在力としての天性の詩人、意志的あるいは意識的な詩人、経験し体験する人間という3つの部分からなるヘルダーリンの内部にこの自我はとどまり、ディオティーマ体験の後もなお支配的だった。(彼の本質のこの3つの構成要素の変動的な関係から、ヘルダーリンの運命を読み取ることができよう。)しかし今や、現実を体験する自我が目覚め、そうした自我の印象が、文学的な自我にもたらされた。体験の流れが供給されることで、観照は初めて意義と効力を獲得したのである。イデーの近親交配に経験の血が供給されたわけだ。

もちろん、ヘルダーリンの観念は相変わらず自己完結した確固たる世界を形づくり、その世界はよりよい世界であって、外部で体験された日常はそれに関連づけられていた。青年がかつて押韻詩節によって病的な夢想にひたったギリシアのイメージは漠然とした寓話の世界以上のものではないことが明らかになったが、今度は、新たな、ヘルダーリンにとっては具体的な、現実から鋭く際立った観照が、現実の基準として課せられることになった。オーデにおけるギリシアのイメージは幻影ではない。ネッカー川やマイン川の風景、ハイデルベルクの落石の直接の体験がなければ、こうしたギリシアのイメージが現実を内包する性格を帯び

ることはなかっただろう。生気のない理念が現実によって栄養を補給され、強化されている。ドイツの風景とどこにも存在しないギリシアの風景がそれによって復活する。詩がその都度成立した。だが、ここで、体験されるべきもの、存在すべきものに直面して一種の変節が起きた結果、純粹な、次第に純度を増す精神の形態、詩人の風景として損なわれることなく生じたものは、生に應用されても、その可能化、現実化は必然的に失敗に終わらざるを得なかったのである。

ディオティーマとズゼッテ・ゴンタルトのあいだにはっきりした断絶は認められない。理想と現実、パルナッスのイメージとシュヴァーベン・アルプスがそうであったように、互いに排除しあうことはない。だが、相違ははっきりしている。ヘルダーリンの出発後、恋人のように、しばらくしたら戻れるという彼からの便りを心待ちにしながら窓辺にたたずんでいたあの女性は、作品の中で、ディオティーマのイメージとして大きな存在を占めるようになった。しかし、そのイメージは、幸運にも残された手紙の束が示す別の偉大さについては、何一つ伝えてくれない。『ヒュペーリオン』や詩に登場するディオティーマ、ヘルダーリンがズゼッテ・ゴンタルトに宛てた手紙の中のディオティーマでさえ、愛するものの直観が見出した現世的で知覚可能な理念というよりはむしろ、詩人の心の証なのである。相違は明白だ。理念が、極度に緊張したエロスが認める感覚的な現実の最高の所産であるとするれば、理想は、ヘルダーリンが現実、この完璧な女性にあらかじめ付与したイメージであることがわかる。この恋人は、詩人にとって、理想が目に見える存在と化したものなのである。これはロマン主義に特有の態度であって、各事物にあらかじめ具わっており、それを理解するには絶えざる努力が必要な理念を、生得のものとして個人の魂に移すギリシア人の態度とは異なっている。現実には、個人が考える通りの存在であることが求められる。すべてを拘束する現実のイメージの合致は、客観的な事実の即物的な認識ではなく、主観的な自我の一致もしくは相互承認として生じる。理念の要求によって理想が現実のものとなるというのは、それに身を委ねる人間にとって危険な確信である。理想が絶対化するにつれて、幻滅の可能性が生じてくる。ディオティーマの場合のように、理想と現実が往々にして宥和されうる。だが、その調和は長続きしない。心を閉ざした観念論の哲学者の無思慮ぶり、彼らが現実、異質な秩序を課すときの無頓着さは、詩人には拒まれていた。現実との接触は、詩人の意識を過酷な幻滅に追いやり、救済の領域は彼からますます遠ざかり、解釈の試みはますます困難なものとなっていった。現実、ヘルダーリンの後にぴったり付いて、受け入れることを強要し、次第に広がりを増す彼の讃歌の世

界にあらゆる方向から侵入して、形をなさぬままそこに横たわった。その落ち着きが人々には冷酷に見える世界の支配者の観念だけが、分散した諸要素の間で、ゆるやかな結びつきを形づくることができた。ヘルダーリンが呼びかけた大部分のものが秘密にとどまり、不可解な言葉で語られ、暗い英雄的な運命の思想に包含された。書簡から見て取れるように、こうした思想を通してヘルダーリンの繊細さは悲劇的な雄々しさで武装され、その崩壊まで外部のもの、殺到から身を守ることができたのである。

『パトモス』は最後の讃歌で、ヘルダーリンはその内容を理想と関連付けようと努めている。直観された不可避の現実が、神的な昼と昼の間で理想の神を隠匿する、見通しのきかない形のない夜の世界と見なされている。現実と理想を互いに関連付けようとするこうした極端な解釈の可能性が、『パンと葡萄酒』ではかなり具体的に実現されているとすれば、『パトモス』では疑わしい事実が互いに無関係に、あたかも盲目的に並存しているといえる。どの問いも別の問いを内包している。問いは互いに衝突し合い、最終的な解明のあとにもさらに新たな疑わしさが生まれる。『パンと葡萄酒』ではまだ、神の夜は人間の運命と見なされている。

「しかし友よ、われらはあまりにも来ることが遅かったのだ。もとより神々は生きている、しかしそれはわれらの頭上の、別の世界のことだ。そこにおいて神々は無限のはたらきをつづけている、そしてわれら人間が生を保っているかどうかにはほとんど心を労していないように思われる。それほどに天上の神々はわれらをいたわっているのだ。なぜなら、弱い容器はつねに神々を容れることはできず、人間はただときどき神的な充実に堪えうるばかりだから。」 (手塚富雄訳)

だが、後期の讃歌では、恐れや服従、訴えが神の名に流れ込んでいる。この神は喜ばしい存在でもなければ、愛される存在でもない。彼には非人間的なもの、人間性から遠いものがつきまとっている。

「だが畏怖すべきは、神がそこへかしくへ極まりなく生命を撒いたことだ。」 (手塚富雄訳)

『パトモス』にはこのような詩行があり、かつて普遍化された運命が個人に感知されている（詩人が草稿につけたタイトルもまた重要であり、それによると、運命の血族としてのクライストについての讃歌が計画されていたようだ）。

「けれども、この願望は運命に対しては分別のないものだった。しかし神々の息子たちというものは最も盲目なものなのだ。人間ならばおのれの家を知り、けものにも巣を作るべきところが与えられるが、神々の息子たちには、いずこへゆくのかを知らないという欠陥が、経験のない魂のうちに与えられているのだ。」 (浅井真男訳)

こうしたもっぱら精神の内部で生じた出来事に比べると、ヘルダーリンをフランスからの帰途に襲った病気は、副次的な影響力しかもたない。彼の造形力の麻痺は、この病気だけでは説明がつかないのである。1802年のペーレンドルフ宛ての手紙で言及されているヘルダーリン自身によってパラフレーズされた日射病（「そして人が英雄たちについて言う表現に従えば、僕はこう言うことができるだろう、アポロが僕を襲ったのだ、と。」）が、衰弱した精神を襲った。詩人はなお2年間は正常な生活を営むことができた。疲労と病気から一時的に立ち直ったヘルダーリンは、最後の最も偉大な讃歌を作り、ピンダロスとソフォクレスを翻訳した。ギリシア語と同質の空前絶後のドイツ語を、彼はまだ意のままにできた。医学的な所見としての病気がヘルダーリンの人生から除去され得ないとしても、原因と作用の関係を解明しないままにしておくことは当を得ているし、そのことは分別ある医者たちの意見に従えば病気の本質とは矛盾しない。少なくとも、ヘルダーリンの肉体が意識の障害に屈服したという推測は論破できない。とりわけ、その外見的な完璧さに関係なく、高貴ではあるが無力な精神のあらわれとしての詩人と彼の断片的な作品に真剣さと畏敬の念を認めることは重要であろう。

断片のまま残されたマドンナについての讃歌で、ヘルダーリンは、歌を台無しにしてしまう憂鬱を嘆いている。憂鬱は精神にとって致命的な力をもっている。それは希望を失い信仰の気力をなくした者に襲いかかる。それが不可解なものである以上、存在の謎が憂鬱を呼び起こすのではない。神秘的なものは人を不安にし、人の落ち着きを失わせ、人にあこがれを抱かせる。不幸は、信仰のある者にもない者にも、局限性の苦痛を喚起する。だが、憂鬱に襲われた者と彼の人生は、力や意志として感じ取られる運命の外部にある。彼は、非在と存在のあいだの王国、不屈の存在にとどまるには不十分だが、存在をもはや示唆的ではなく昇華状態に移した負荷とを感じるには十分な、影の王国に住んでいる。ギリシアの冥界は、極端に憂鬱である。そこに住む影は、まだ人間の能力に関与している。しかし、彼らの修練が行為を終わらせることはない。影は、自分たちが苦痛を感じ取ることができると感じてはいる。彼らが喜ぶ

ことはないが、自分たちが喜ぶことができることは知っている。憂鬱は彼らを時間や現在に関与させない。タンタロスは、渴きを静めることも、それに屈服することもできず、ひたすらのどの渴きに苦しむのである。

ディオティーマの死の知らせを受けたとき、ヘルダーリンも同様に振る舞わざるを得なかった。この出来事は、比喩的な作用を及ぼした。悲痛な苦しみに長い間耐えた彼を、不思議な落ち着きが救った。憂鬱にとらわれた者は、他者が苦痛を感じないところで苦しむが、他者がすぐに参ってしまうところでは持ちこたえることができる。恋人の死がヘルダーリンに及ぼした影響についての証言を、われわれは持ち合わせていない。だが、彼の沈黙は、具体的な苦痛が絶え間なく、急速に、憂鬱の抽象的な苦痛に移行したことを示しているように思われる。いくつかの決まり文句が、憂鬱で麻痺した自我が足を引きずって歩くときの弱々しい支えとなった。ヘルダーリンが後に親族や友人、とりわけ母親に宛てた手紙に類出する卑下と屈従のねじ曲げられた表現に、こうした弱さの増大がはっきり認められる。硬直した言語がずたずたの感情をときおり助け上げる。そのたびごとに、事態は複雑さを増す。ヘルダーリンは、自分が感じるままを感じ取る。「私が、私たちのおばあさまの亡くなられたことについて、おばあさまを愛している私たちの胸の苦しみを語るよりも、むしろ、この際自制を欠いてはならないのだということのほうを述べましても、私を誤解なさらないでください。」(横田ちゑ訳) 祖母の死に際して、哀悼の辞の中で彼にこうした言葉を吐かせたのは、無感情ではない。ヘルダーリンの繊細な精神の中にもなおも存在していた感情は、実際には、もはや自発的、直接的で動機と結び付いた表現の形を取ることができなかつたのである。晩年の彼の手紙を構成する単調な、実生活からまったくかけ離れた言葉のあやに、その極端で不気味なあらわれをわれわれは認めることができる。

憂鬱は、水を掬うことも葡萄を摘み取ることもできない。それはまた、タンタロスのように死ぬこともできない。ヘルダーリンの晩年の讃歌の断片は、詩を手に入れようとする憂鬱のむなしい試みなのである。その断片的な性格の必然性はほとんど否定できない。感情の対象は、まだ詩人の眼前にある。しかし彼はそれをもはや表現できない。彼の精神の把握の長大な射程とまだ到達できない対象の間の開きを橋渡しする決まり文句、讃歌や断片に姿を見せるあの紋切り型の表現は、その都度補足されねばならない。言語、観察、感動といった詩人の手段を、彼は相変わらず自由に使うことができる。しかし、詩の形式を規定し、その起承転結、発話の輪郭と境界、その個々の部分の秩序と関連を規定する内容、ヘルダーリンの世界から生まれ、彼の意識から抹消されたのではなく相変わらず確信されている内容

は、今や、無力感と絶望に苦しむヘルダーリンの意志に反して、彼の憂鬱によってきっぱりと拒絶される。精神の行動様式がはっきりした影響を及ぼす言葉の世界で、われわれはこの経緯をたどることができる。構文は、その法則性を失っている。文の論理構造は崩れている。文はもはや内容を表現せず、ちょうど腕を差しのべるようにして内容を把握するむなしい努力を続けているだけである。晩年の草稿にこの傾向は典型的にあらわれている。そのうちの一つは、「葡萄づるの水気が」で始まり、表現意欲の目標、意図を忘却して、房という形象のもとに休止する。「葡萄の房が、葉のつくる涼しいアーチの下で成長するとき、男たちにはある強さが与えられるが、乙女たちは、また蜜蜂は香りのただよふのを感じるであろう。」表現意志は持続しようと努め、新たな形象のもとにとどまり、結局は、引き出されるべき結論、言われるべき本来のものに力無く逆戻りする。発話は中断され、完全に宙ぶらりんのばらばらな形象と化す。「かしの樹のまわりにざわめき・・・」(浅井真男訳)

憂鬱に屈服した経験豊かな人間の破滅は、讃歌の世界から無理やり追放された自分自身を意識した詩人の破滅でもあるが、それでもヘルダーリンの天性の作家精神が完全に破壊されることはなかった。彼の作家精神は彼の中でイド(無我意識)としてなおも創作を続けた。彼の守護神の自発的な力は、なおしばらくは無人格と化した精神の中で作用し続けた。その力はもちろん恣意的にしか姿をあらわさず、人間の法則や形式を気にかけることなく、形象化し発言した。詩人の意志は、ここで明らかに新たに生じた内容を完成に至らしめる力をもはや意のままにすることができなかつたのである。

ヘルダーリンにおいて、抒情的なものは、きわめて純粋な、これまでドイツ語圏で認められたうちでもっとも純粋なあらわれ方をしている。ヘルダーリンはこの特性を意識していた。静かな内的、外的観照の幸福な時間、無制限の詩的自己所有の日々が与えられたホンブルク滞在中の1799年1月に、母に宛てて書かれた自分自身との対話の中で、彼は、文学と哲学の間に決定的な境界線を引いている。彼は今まで内容のない詩人の名前を恐れ、この汚名を免れるために哲学に取り組んできたが、相剋と不快しか体験できなかった。今の彼には、詩人は自立した存在であり、哲学は彼を自分の「本来の」傾向から遠ざけているように思われる。

詩は、厳密に境界付けられるべき内容の担い手であるばかりでなく、表現それ自体、表現されるべきことから分離され得ない。そもそもそうした分離が言語においてどの程度なされ得るか疑問である。完結した思考は完結した言語

そのものからは分離され得ないように思われる。言語的に見ると、抒情的な表現は散文的な表現と対立しない。言語における抒情的なものを、ある単純な事情の装飾的な書き換え、戯れているような、回りくどい、気取った書き換えと見なす表面的な見方をやめれば、抒情的なものは散文的なものに比べると高揚である、厳密さ、表現の可能性の増大であるという認識が生まれてくる。抒情的な表現は、散文では完全な形であらわれ得るのだろうか？ 普通理解されているところでは、散文はその完璧さを要約によって獲得する。だが、たった一つの詩行は広大な景観を見通することができる。抒情的な表現は、意味するばかりでなく存在する。言語に、仲介者、奉仕者としての立場を超越させ、表現する内容にたいして前提条件としての意味を獲得させる何か、抒情的な表現の根底にはある。内容は、それ自体から、詩人の恩寵から言語をつくるきっかけになり、さらに、詩人の手で強化された言葉は、ときには自立し、理性が制御できない暗闇に突入する。

内容と表現、思考と言葉は、互いに区別できない。単なる芸術形式以上のものである抒情詩は、ヘルダーリンの場合のように、まったく特殊な生活様式を作り出すある特定の精神態度に由来する。本来抒情的なものは、本性、その担い手である詩人に固有の精神状態であって、確かに意志に従い、意志的に用いられ得るが、晩年のヘルダーリンの場合のように、意識の無力さを乗り越えるために、自分の力を十分に利用することができる。詩人に言語は天分として与えられている。たとえ彼がそれを慣らし、目的と結び付いた意図に応用する術を知らなくても、詩人の中に生が機能している限り、言語は彼の創造的な本性とは不可分であり、彼に忠実であり続ける。

ここで決定的な境界を設けるのではなく、考察を継続することは、詩が本来制約のない形成物であり、その外的な広がりや内的に歩測可能な領域にたいして無拘束の関係にある存在であるだけに、許されよう。詩は、その性格からすると断片的である。詩は、個々の部分、個々の詩節で、完璧さを明らかにするが、この完璧さは、全体の関連付けを促進するというよりはむしろ崩壊させる。最初に聞き取れる言葉で始まるのではなく、最後に聞き取れる言葉で終わるのでもないが、細部にわたって完璧に言いあらわされる心的な興奮の表現である詩は、自己完結した稀有の作品である。どの詩も次の詩を要求し、同時に、十の詩が一つの詩以上のものではない。ここで詩一般の特性と見なされているものは、ヘルダーリンの最晩年の讃歌では、支配原理の意味を獲得している。ヘルダーリンが失われた他のものの代わりにそれを利用したのではなく、それはあたかも自分の力で生じたのである。外面的にはまだ破綻していない『追想』というタイトルの讃歌では、観念論的な思考の

骨格はもはやはっきりしない。ここではただ推測することしかできないが、記憶の力を呼び寄せるテーマだけが聞こえている。

「だが、記憶を奪う大洋はまた記憶を返すのだ、  
愛はまたひたすらに眼をひき留める。だが留まる  
ものをうち建てるのは詩人だ。」（手塚富雄訳）

結末部が約束するのは慰めである。だが、それまでの詩節で、人間の存在の不安と逃避についての恐るべき洞察が浮かび上がる。ここでは、『パトモス』にはまだ認められなかった世界の嘆きが歌い出されている。今まではまだ魂の異常な緊張のもとで次第にその神秘と謎を深める神性にたいする信仰によって抑圧されていた絶望が、ここでは妨げるものもなくその全貌をあらわす。神への祈りが見られないのは、奇妙なことだ。慰めは、詩人の人間としての本性の発露である。その本性は、守護者、解釈者であって、もちろんすでに無力で疲れており、恐るべき秩序の神秘の前で後戻りし、その神秘をもはや把握することはできず、やつれ、忘却が呼び起こす憂鬱により麻痺させられている。

「しかし私になにびとかが暗い光にみちたかぐわしい杯をすすめるなら、私はそれを受けて憩おう、  
木陰のまどろみは甘美なものであろうから。」

今まで天上的なものとの交わりに慣れてきた詩人は、今や完全に人間的なものにすぎり、ありのまま語ったり聞いたりすることのできる単純なもの仲間となる。

「だが対話することはよい。そして心情の思いを言うこと、愛の日々と行なわれたさまざまな事業について多くを聞くことは。」

歯に衣を着せずにもものを言うことで十分ではないのだろうか？ 真正な啓示以外で神が世界に示現することはないのだ。現象の根底には何かがあることを予感しながら、ヘルダーリンは、この彼には隠されたもの、解釈不可能なもの、表現不可能なものを、選りすぐりの形象の描写によって言いあらわそうと試みる。現象が正確に観察され、肉体の背後にある言葉の本質が示されるまで、抒情詩人の鋭敏な魂によって観照されることで、まだ言われていない最後のものが獲得される。

悲歌『パンと葡萄酒』の冒頭に置かれた夜の形象は、ヘルダーリンにおける人間と超自然の関係を内包している。この関係が形象で言い換えられているのである。夜は被造物の上であり、神々はまどろんでいる。だが、この闇は希

望から遠く距たつてはいない。何か活動的なものが、魂を庇護するようにその中に存在している。しかし、詩人がこうした観照を解釈し、人間についての洞察に心を開き、それらの関連を説明しようと試みる、この悲歌の後続の8つの詩節は、夜の意味を明らかにしてはくれない。これらの詩節は、不可解な形象の証明力がなければうまく機能しない個所をもつやっかいな構造を示している。

こうしたヘルダーリンの形象は、明確で、鋭く、切迫した、突き刺すような、心に食い入る、単純でない、軽々しくない、はっきりした、それでいて分かりにくく、陰のある、厳格ではあるが不可解な、重々しいが流動的でもある形象だが、詩の中では、場合に依りて独立した地位を占めている。「暗い光」という矛盾した表現は、言葉が観照をつかむときに使うやっつこのようなものだ。双方の言葉の意味の間には意味深い説明が可能な関連は認められないが、その中から、真正な、現実に存在する形象が立ちあらわれる。

ヘルダーリンの観照法のこだわり、忍耐、忠実さは、原則として所期の目的を達成している。理想は破壊されるが、その廃墟から理念が生じている。理想の王国が建設されるはずの現実に素材を接合する力は不十分である。しかし、この素材を観照によって自分のものとするので、詩人は、いわゆる感覚的な現実の理想像を示したのである。彼の言葉で現象を名付けている。彼の言葉は予知的なので、同時にその精神像が見えてくる。ドナウ川は、次のように表現される。

「だがこの川を人はイスターと呼ぶ。この川はうるわしく土地になじんでいる。円柱をなす樹々の葉は熱し、ざわめいている。樹々は野生のままに入り乱れて立っている。その上には樹々とはちがう高度を保って、岩々の屋根がそびえている。」

（浅井真男訳）

流れが短い樹木の生い茂った急斜面の間を通り過ぎたり、アーキトレーズや切妻のように垂直に切り立った岩壁が流れにのしかかったりする、ボイロン近傍のドナウ川の光景は、ここでは、その本質の妥当な形象を獲得している。ドナウエッシンゲンの近くの風景も同じように喚起される。理想により構築された詩の部分は廃墟のままであり、その輪郭も定かではない。ライン讃歌が、流れの形象や現象を巨大な隠喩として、明らかに人間の生や運命と関連付け、形象が思考の内容を伝える手段であるとすれば、（すでに憂鬱に曇らされた）創造主と被造物の関連付けられているとすれば、ドナウ讃歌では、西洋と東洋の精神的な交流という意図的なテーマがとぎれとぎれに聞こえてく

る。『イスター』の理念，理想像は重すぎる。意図，予言，教訓も，次第に不可解な形象に巻き込まれていく。同じ詩には，その理由付けも見いだせる。つまり，詩人は符牒で話しているのだ！思考はいわば具体化される。ヘルダーリンが予感しているように，ドナウの流れには，世界の思考，この世界の暗示が含まれている。

「太陽と月とを，また日と夜とを，心情の中に分  
ちがたく保持して，運び，天上的なものたちが  
温かく互いを感じ合うためのしるしこそは，ぜひ  
とも必要だからなのだ。」 (浅井真男訳)

それがどうして必要なのか？洞察はもはや直感を秩序立てることができない。神は存在する。このことは，たとえ「一切が混ぜ合わされ，無秩序に，太古の混乱が帰ってくる」としても，友人シンクレアに寄せられたライン讃歌の最終節からうかがえる。これに対して，『イスター』は，「だが，あの川のなすことは，誰も知らない」という留保的な表現で終わっている。

この知覚の不可能性は，ヘルダーリンの詩の形式を崩壊させる。「火にひたされ」で始まり，思考の具象化の実例でもある讃歌の断片は，この経験をきわめて厳格に実証する。「放縦」に見える現実は，無秩序を掟として持っている。秘密の隠された秩序は，つまるところ，その作用をあとであらわすのだろう。「一切のものは蛇と等しく，消え去らねばならぬ。この掟は預言の力を持ち，実現を夢見ながら，空の丘の上にまどろんでいる。・・・しかし道は悪い。」そして，すべてが「保持されなくてはならない」。ヘルダーリンは，見知らぬ神が人間に彼の掟を課したこの危難に，極限まで「忠実」であろうとする。もう一つの断片では，次のような問いが見られる。「神とは何だろうか？」「知られてはいない。それでも空の姿は神の諸々の性質に満ち満ちている。」「あるものが不可視であればあるほど，それは無限のものの中に入り込む。」

かつてヘルダーリンがそれで詩人の意味や使命を成就させようと努めた，告知者や教師，訓戒者の声は，今や，こうしたよそよそしい眺めの前に沈黙せざるを得ない。それをテーマとする詩は，まだ少なくとも表面的には完結している。『イスター』やボルドーの町，ガロンヌ川やドルドーニュ川の風景を呼び起こす『追憶』と名付けられた讃歌，先ほど言及した詩，より小規模なまとまりのある断片がそれである。事物にはよそよそしさが潜んでいる。自然もまたよそよそしくなり，その親しげな外見で詩人を魔術のように呪縛する。まだ言葉の精神は，直感を相変わらずの力強さで言葉に移すことができる。だが，ヘルダーリンがそれを関連付けようと試みるやいなや，彼はその隠された，

より真正な内容の御しがたさに疲労せざるを得ない。観照は，讃歌の架空の見取り図の上に，広くばらまかれた瓦礫として残される。観照はそれ自体，きわめて個性的な特徴を持っている。その厳密さは，魂が感覚的な印象の魔術を受け容れるときに示す過度の明確さを合わせ持つ。

「黄ばんだ畑にまっすぐな茎から生長の音が聞こえ，穂が秋の日のようにうなだれる真昼時ならば・・・」 (浅井真男訳)

事物の具象性で，より確かな，同時に，省察がわれわれに教えてくれるものよりも不可解なものの存在が明らかになる。かつては詩人中もっとも観念論的で，理知にエクスタシーを感じる熱狂的な人物であったヘルダーリンは，今やはっきり具象的なものに向かう。

「その間，私には許してくれ，あなたへの愛を消すために，あなたの道をさまよい歩き，道のべで野生のいちごを摘むことを，おお，大地よ。」 (浅井真男訳)

断片において新たに発見され，讃歌の代わりに不完全な形であらわれた世界は，偏狭な，その精神的な地誌からするときわめて低位の世界である。故郷は，かつての『さすらい』のように神話的なものにまで高められた土地としてあらわれるのではなく，まったく具体的な，ときには粗野なビュルテンベルクとして登場する。もちろんヘルダーリン流に凝縮されてはいるが，くつろいだ郷土文学で周知の素材の痕跡も認められる。

「けれども水夫はとかく，昼間には靴下を編みながら眠りこけるような女に会いたがるものだ。ドイツ人の口はよい音を立てそうもない，しかし接吻は痛いひげの生えた頬に愛らしい音を立てる。」 (浅井真男訳)

この頃のヘルダーリンには，シュヴァーベン人の特徴がかつてなかったほど決定的にあらわれている。ここで見，感じ，耳を澄ましているのは，紛れもなく古いビュルテンベルク地方出身のシュヴァーベン人だ。この地方に特有の造語に満ちた言語がさらに付け加わる。ここでは，きわめて単純かつ特殊な対象が問題になる。

「黄ばんだ葉の上に葡萄の房は，葡萄酒の望みとして安らうが，そのように頬の上には乙女の耳にさがる黄金の耳飾りの影が安らっている。」

(浅井真男訳)

魂が俗事を志向するときの節度は、豊かさに転化する。なぜなら、その精神的な感性の点でかつてのロマン主義的なギリシア憧憬よりもむしろギリシア的なものに近いこうした隠喩の背後には、永遠なるものから生じ再びそこに戻っていく過剰な創造の喜びが圧縮されているからだ。外界をつねに保証する葡萄山や葡萄の房は、きわめて永続的な象徴であることがわかる。それらが含む生の象徴は破壊され得ない。今一つの断片がそれを直接表現している。

「葡萄山の上に火が燃え、秋の季節に葡萄山が炭のように黒々と見えるのは、生の脈が葡萄の木の影の中でいっそう熱く息づくからだ。」

(浅井真男訳)

生の観念論的な解釈に対する不信がその存在を主張する。より単純な、より強靱な存在が称賛される。狂気の翳りとしてその妥当性を破棄されたチュービンゲンでの晩年、ヘルダーリンは、自分が置かれた新たな特殊な状況を知っており、たとえ後世の観察者たちには真面目に受け取られなかったにせよ、まったく真剣にこの状況をかつての価値の世界と対照させようという意識にとらわれている。その観念論的な解釈の可能性にかんじてかつてのロマン主義者にとっては重要だった現在や日常的なものから、存在するものに有益な介助を感じ取る満足感が流れ出る。岩地も今や「牧草地としてよく」、「乾いたものは飲みものに」加えられる。ヘルダーリンが住んでいたチュービンゲンのネッカー川の岸と急坂の間に建つ小さな家は今日も保存されているが、それは次のように言い換えられる。

「ここに住もうとするなら、段丘のほとりがよい、そして流れにのぞんだ絶壁に小屋が突き出ているところに居を構えるがよい。おまえの所有とっては、息をつくということだ。・・・なぜならば、眼が閉じられ、足がくるまれたとき、おまえはそのことを悟るだろう。」

(浅井真男訳)

日々通り抜ける風景の現実や情熱をもって観察された事物は、いわば明白である。境界の間で迷う人間、本来の故郷喪失者だけが、おそらくそれらをはっきり名指すことができる。唯物論者にとってそれらは目立たず、観念論者にとってそれらは障害である。だが、事物全体が贈り物として、信仰の有無にかかわらず客の謙遜に身をゆだねる。

ヘルダーリンがその暗い後半生を送ったチュービンゲン

は、ヴェルテンベルクに近接している。その形の荘重さと線の柔らかさにもかかわらず、その風景は妙に味気なく、無愛想である。ネッカー川の東側のシュヴァーベン・ジュラ山脈の樹木の生い茂った急斜面を2時間ほど登ると、荒涼としたアルプスのゆるやかに傾斜した不毛で殺風景な面を見渡すことができる。西の方にシェンブーフ山地の広葉樹林がのびている。感性のない人々は、何世紀も前から、こうした風景の中に大きな建造物を置くことをやめている。郊外のペーベンハウゼンには、ロマネスク様式の修道院附属聖堂があって、高度な建築術の最後の証となっている。チュービンゲンの世俗的なゴシック様式の司教座教会がすでに、体面上装飾を施した営業用の建物にすぎない。礼拝堂と山の町の高みにそびえる世俗の城にも似た神の堅固な城、ルネサンスの頃流行した門を通り抜けて入る中庭の壁の骨組みは、葡萄園主の巨大な邸宅を思わせる。カルヴィニズムの抽象的な精神性と散文的な即物性は、日曜にも仕事日にもきっちり分け与えられる。隣接する貧しい地区にヴァルド派の信者たちが築いたフランス語の名前の村々があるのは、偶然ではない。骨の折れる葡萄の栽培がおこなわれているようなところはほとんどない。チュービンゲンの町の農民のギャグは、そのごつごつした荒々しさ、抜け目なさ、ずる賢さで知られている。

ヴェルテンベルクが不滅の王国に派遣した傑出した精神の持ち主たちは、誰もが知っているうぬばねに満ちたシュヴァーベンの格言が言うように、シュヴァーベン人には規範と見なされていない。「シラー、ヘーゲル、ウーラント、ハウフ、彼らはわれわれの規範だが、ほとんど目立たない。」むしろ彼らはそれぞれ、種族の一般的な性格にそむく反作用の現象を示している。こうした事例の頻発は、反対の意味で、通例を代弁している。偉大なシュヴァーベンは、天才のセンスが発揮できない地元を離れて、国外に出ていく。彼らの出現は、まず疑いの目で見られる。異例なものを、シュヴァーベン人は、無意識にくだらけ常軌を逸したものと感じ、過去から距離を置こうとする。利得が明白なとき、彼は偉大なものを初めて評価する。遊びは、その男性的な真剣さの点でも、したたかで利得を気にかける彼の本性には縁遠い。シュヴァーベンの家具職人が勤勉よりも気まぐれを重視し、たとえば寝台や棺のかわりにギリシア神殿のひな形を造るなどということはある。ヘルダーリンが下宿先のツインマー親方にある日そのことを頼んだとき、実直な親方はこの無理な要求をきっぱり断り、ヘルダーリンの母親宛ての手紙の中で彼自身が述べているように、偽善者ぶることなく返答している。「自分にはパンのために働かなくてはなりませんし、あなたのように哲学的な平静の中で暮らせるほど幸福ではありません。」ヘルダーリンは心底おどろき、悲嘆にくれ、しばらくして

から鉛筆で板に詩を書きつけた。

「生の流れの描く線はさまざまで、道や山の境界に似ている。この世のわれらの存在は、かしこで神が調和と永遠の報いと平和によって補ってくれるかも知れない。」

「一息つくこと」さえ、彼にはもはや無事ではすまされなかった。自我は分裂していた。ヘルダーリンは、きわめて風変わりな妄想を仮面のように身につけていた。ときおり、無傷の意識がよみがえり、彼に自分が置かれた状況を教えてくれることもあったが、そんな時、彼は自分が苦悩と自分自身についての嫌気で引き裂かれているのを感じていた。いじらしいほどの愛情を込めて、彼は俗事に執着し、それを自分の唯一の救いと考えた。自然や四季の永遠の回帰のありのままの経験を表現するために、彼は通常、もっとも単純な形式として、強弱格よりはむしろ弱強格の四行詩を用いている。しかし、どの行も硬直はしていない。本来隠された繊細で靈的なリズムがその強固な構造を貫き、あちこちで生じた言語表現の起伏をも包含し、それに作用して、独自の厳密さを身につけさせる。

「やさしい風景よ！そこでは街道が真ん中を貫いて平らに伸び、夕風が吹き起これば青白い月が昇り、自然がきわめて単純になり、山々が崇高な姿をして立ちならぶ。やがて私は家を思っただけで帰路につく、家で金色の葡萄酒を見出すために。」

(浅井真男訳)

長大な詩『満足』や他の数多くの箴言詩で称讃されるように、生それ自体が、今や最高の追求の対象、断念と同時に実現の対象となる。生きている限り、人間はこの地球の一部である。星を手でつかもうとしても無駄なのだ。シュヴァーベン人の生き方に起因するこの2つの領域とその要求の間の明確な分離がここでも姿を見せているが、それは、より喜ばしげなもの、より美しいもの、より偉大なもの、つまり芸術に変容している。自然は天国の反映であり、幸福な者に、必要なものと見なされ盲信された来世をあらかじめ味わわせてくれる。ヘルダーリンの自我は、拘束力をもち何度も保証された普遍性に逃げ込む。このみすばらしい散策者は、確かに、銀ヤナギにおおわれたネッカー川の中洲で、自分が称讃する生に文字通り関与してはいない。かすかな憧れが詩行を貫いている。しかし、少なくとも、切望された生は、かつての理想的な要求とは違い、日常と鋭く対立しているわけではない。生は、同じ空間内の、人の手の届く距離にあり、より突出した、より豊かな、

より強力な存在なのだ。偉大な地球は駆け去り、詩人は地道に歩いていった。彼は生を喜んで受け容れる。なぜなら、両者は同じ大気を呼吸しているからだ。運命の不平等はつらいものではなく、自己完結した世界が生を包含するあの魅力的な全体性に止揚されているように思われる。固有の宗教性が、晩年のヘルダーリンの観念が没入するリアルな形象を美化している。ビュルテンベルクの果樹園主が聖書の主に変身する。富は魅力を獲得し、その重苦しい敵意に満ちた即物性を脱却して、神意により地上に出現することで、生き生きした崇高な有和的な力であることを示す。人が完全な尊厳の中で成長するのに相応しい唯一の環境を富が生み出すのはそのときだ。富の存在そのものが、すでに貧者には、励まし、喜び、慰めを意味する。富は、静観、自然な中で静かになされる瞑想の庇護者であり、美と確信は、現世では富によって守られるのである。

「人あって、豊かな財貨に恵まれ、その国が果実によって、その住家が黄金によって飾られているならば、彼はなおこの世で心を楽しませるべき何を欲しがろう？」  
(浅井真男訳)

旧約聖書と古代の生の喜びが、これらの詩行では、互いに緩和し合いながら、詩人にも意想不到的仕方では混ざり合っている。その人間的な心情からヨブを破滅から救ったブズ人は、ここでは神に守られており、自分の所領を歌で讃えるホラティウスは、世界喪失の擬古的な感情を静めるのに必要なストア派をもはや必要としない。極度に強要された人間だけが、こうした快適で安全な存在のイメージを描くことができる。ただ、純真さを保つには、高い代償が必要だった。純真さを生であがなうことはほとんど不可能だった。こうした牧歌的な雰囲気根底にあるのは、怠惰な無欲ではなく、断念の見積もり不可能な尺度なのだ。

無垢の世界の思考や現象は、その色彩が黒い紙に裏打ちされたガラス絵の照度をもっている。未知のヘルダーリン神話が姿をあらわす。悲劇的で神的な青年の均整のとれた相貌とならんで、前屈みになり指を突き出した鉛筆のスケッチ画が示す老年の彼の精神状況が浮かび上がってくる。生がその不可解さで悲劇的なものを引き受けることで、ここで初めて運命がより忠実に成就されているように思われる。

(ヘルダーリンの著作からの引用は、『ヘルダーリン全集』、河出書房新社、1969年に拠った。)

訳者付記

ここに訳出したエッセイは、批評家としてのヴィンクラーの本領を示す好個の一編である。

初出は、雑誌 Der Kunstwart (Deutsche Zeitschrift) の第50巻1/2号(1936年10/11月)。

後に、ヘルマン・リン/ヨハネス・ハイツマン編の評論集 Gestalten und Probleme. (Leipzig-Markkleeberg 1937.) に収録された。

ヘルダーリンが若き日の友人ヘーゲルやシェリングとともに歩んできた道を踏み外すにいたる経緯を、ヴィンクラーは共感をもって描いている。ヘーゲルたちは、理性の秩序や純粋な思考の世界の彼岸にあるドイツの現実次第に妥協していった。しかし、市民生活に根を下ろそうとするヘルダーリンの試みはことごとく失敗に終わる。彼は、隙

あらば自分から身を引こうとする気まぐれな言語と格闘しつつ、生ける死者として生き続けねばならなかった。

ヴィンクラーは、まさにこの詩人の晩年に強い共感を覚えている。彼は、ヘルダーリンの抒情的な精神の薄明、単純で脆弱な押韻詩行に、マラルメやヴァレリー、ゲオルゲにつながるモダニズムの予兆を認める。また、大河の讃歌に見られる粉碎や分解のイメージに、哲学や神学にたいする抒情的なものの自立の萌芽を見出している。

晩年のヘルダーリンにあっては、すべての言辞が、普遍的なものや個人的なもの、両極端に分裂し、この両者は、あらゆる意味の核心からともに遠く離れている。こうした心的葛藤を見抜いたヴィンクラーには、チュービンゲンの塔におけるヘルダーリンの閉塞的な生と、彼自身が生きる現代、両大戦間のドイツの息苦しい生の同質性が見えていたのではなかろうか。